

文化高知 11

水のある風景

横山龍雄

高知には、夕陽の眺めの美しいところがいくつかある。いま天神大橋の架け替え工事が行われているが、かつて、天神大橋から上流に向って、まさに山に沈もうとする太陽の光が、山と雲と川面との間で、金色に輝きながら刻々に変化していく美しさを眺めては、しばし立ち止まって自然の神秘に思いをはせたものである。燃えながら翳っていくその静寂の世界には、祈りを思わせるものがあり、終日の疲れが洗い落とされる。

昔の沈下橋が柳原橋となり、その下流に上水道の水管橋ができ、それまでの視野の広がり区切られてしまったが、それでも石立八幡宮や山内神社の森のたたずまいなど、暮れなずむ川筋の景色は心をなごませてくれる。

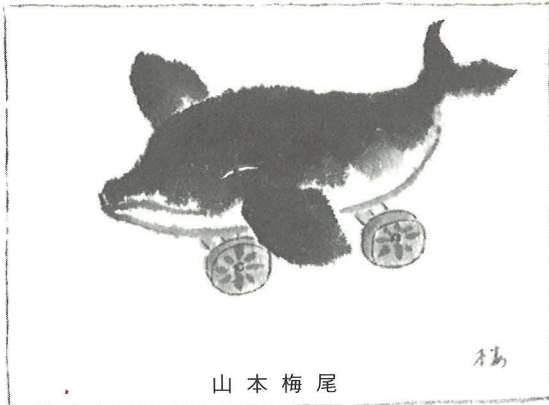
この頃は、朝の出勤は天神大橋の仮橋を渡っているが、もう長い間夕日の沈む頃、帰途につくことはない。

*

毎朝見る鏡川の上流には、高層の建物が建ち、両側の堤防はコンクリートで固められ、人間の営みによって自然は変化し景観も変わってきている。私

達が泳いだ川の流れもやせ、昔の清冽さを失っている。

それでも高知市の水道水が、わが国の美味しい水の選定で上位にあるのは、鏡川の清流によってのことであり、高



山本梅尾

知の平野を潤す命の水であることにはかわりない。

いま市民の間で、この美味しい水を残し鮎の産卵できる鏡川を守ろうという運動がおこり、真剣にとりくんでいた

だいていることは大変嬉しいことである。汚染のひどい江ノ口川でも、沿岸の皆様方が組織的に協力しあって、川をきれいにする運動に立ちあがっていただいている。

*

公共の場を無神経に汚して何とも思わない人の心からは、人間社会の潤いも、生活の文化も、美への憧憬も感ずることはできない。

詩を詠み、音楽に喜びを感じ、絵画や造形の美しさに心をよせる人達には、公共の場を汚し他人に不快感を与えるようなことは、できないと思う。

まちは、そこに住む人が毎日の生活の営みの中からつくりあげていくものであり、外国を旅しても、街のたたずまいや清潔の度合いによって、その国の文化の状態を知ることができる。

いつか、高知青年会議所のメンバーが赤フンドシで江ノ口の汚濁に挑戦したことは、市民への大きな警鐘であり、行政に対する痛烈な批判となった。都市化の進むなかで、緑を愛し、清流をとりもどそうとする多くの人達の心が、清潔で美しい環境をつくり、文化を育み、私達の生活の中に、ほんとの豊かさをもたらしてくれるように思うと同時に、行政の責任の大きさを感ずる。

考えてみると、人は水と切り離せない生活をしており、水のある風景は貴重な文化資産である。(高知市長)

堤のかげに

嶋岡 晨

「潮江村上町」である。それが、戦後もしばらくは登記上の呼称「天神町上町」として残っていたわけだろう。わたしたちが住みついたころは、焼け跡の片隅、堤のかげに、たしかに篠竹の藪も残っていた。だから藪ノ内ともいったのだろう。

大正十三年、十八歳のころ、父はしばらく「大高醸造」の倉男をした。その縁である。服部翁は、さっそくすぐ近所の土地を世話してくれた。天神町一三三番地である。そのころ十四歳だったわたしの記憶にも鮮明だが、梅ヶ辻、天神町といわず、当時は潮江といったがまだ大半焼け野原のままで、売りに出ている土地も、壊れた瓦やひんまがった鉄筋や赤くただれた土におおわれていた。——その一三四坪を、安芸のS氏から二万六千八百円で父は買った(と、回想録に書きとめている)。一坪一二〇円だ。

と余裕をえたころだった。わたしにはしかし、あのがたびしの、バラックの時代が懐かしい。とりわけ、新制高校制度が実施され、県立高知工業建築科にかよふことになったあたり(昭和二十三年)から数年間、あの九千円前後のバラックですごした数年間だ。あのころ、まだ潮江橋のたもとにあった古本屋・井上書店で手に入れた漱石や朔太郎、あるいは戦前の世界文学全集の類に酔わされ、わたしはしばしば夕焼けのなか、鏡川の堤の上をさまよい、ふしぎな内的経験の快感にわなないていた。

昭和二十二年一月から、昭和四十六年八月まで、わたしの家は、高知市天神町四六ノ二番地にあった。潮江橋と天神橋のほぼ中間、いまの1ノ×番地あたりである。もっとも、四六ノ二番地以前の、登記簿記載の「高知市天神町上町藪ノ内一三三番地」

を、さきに記すべきだったか。かなり長い間、そう、住みついて十年以上、そこは「天神町一三三番地」となっていた。

ここに、旧知の土建業者M氏にたのみ、九千円前後で、八畳、四畳半、板の間付きのバラックを建てる。フシの多い粗材を使うから、板壁はたちまち反って穴が開く。安スレート屋根からは、雨がもる。台風ときなどは、飛ばされる前に壊れそうに揺れきしんだ。それでも当時は、ひとに羨ましがられた。

夏になると、よく、パンツひとつで家をとび出し、父と二人で鏡川を、唐人町側の対岸まで競泳したものだ。あのころは父もまだ四十代。苦しい挫折を体験しながら、よく耐えぬく気力、体力があった。

いまふと思い出し、もう二年も前、酒亭「とんちゃん」で横山光夫老にもらった地図をひろげてみる。「むかしのことを小説に書くとき、役に立つろうきに」と、くれたその古い地図は、たぶん大正十三年以前のものだ。高知駅がない。土讃線がない。

——そんなゆかいな、のんきな環境だった。そこに一年と住まないうち、震度五の「南海大地震」(南海道沖大地震)にぶつかり、津波のため、低湿地のわが家は二週間ほども泥水にまかっってしまった。

県会議員に立候補して、落ち、木炭集荷販売業をおこして、失敗し、父はその後五、六年のうちに一三四坪を切り売りし、せっかくの領地を六十坪に縮めてしまった。

昭和三十八年から数年間、妻子を連れてわたしが東京から帰郷し、一つ屋根の下に暮らすうち、父は不治の病にたおれた。数年後、母もまた地上を去った。

国鉄高知線、須崎・高知間の開通が、大正十三年十一月。高知・高松間土讃線の全通は、昭和十年九月という。——とにかくその、高知駅のない地図によれば、天神町あたりは、

当時、セレベスから引揚げてきて、やっと高知県警視になり警務課につとめ始めたばかりの父は、困ったあげく、梅ヶ辻の「大高醸造」のあるじ・服部久吉氏を訪ねて、相談した。

バラックから本建築へと脱皮したのは、昭和三十六年。生命保険の外交員として、父の生活が安定し、やっ

時代は変わり、町も変わった。しかし、わたしの青春は、あの堤のかげに今も息づいている。わたしを呼ぶ声がかきこえる。(詩人・東京在住)

日本のニースをめざして

イベントに賭ける

杉原 郁夫

昭和七〇年の夏、土佐湾の海はヨットやクルーザー、ウインドサーフィンのカラフルなセールに埋めつくされ、空はハングライダーやセスナが飛びかい、蜂の大群が舞っているようである。海辺はホテルやペンション、バンガローが青い空と海の景色を一層素晴らしく彩っている。そして若者の群れがブティックやカフェテラスの街並みを水着で闊歩している。浜にはトップレスの娘も居る。山間の西日本一の多目的ホールから歌や歓声が朝まで聞えてくる。

この時代のヒーローを目指してアマチュアバンドやシンガー達がファンと一緒に熱狂している。蒼い山々の丘の上には、老人ホームや長期滞在用老人ホテルがあり、その側には日本一と言われるゲートボール場やゴルフ場、テニス場が。また室内プールのあるアスレティックジムがあり、ここはジャズダンスもできるスポーツクラブである。

どこも満員だ。老人も中年も若者も子供も、スポーツやゲームを楽しんでいる。子供連れの若夫婦は年に一度はバカンスをかねてこの地を訪

れて、子供達はおじいちゃんと一緒に遊び、若夫婦はアスレティックジムへ行き、又親子で釣りやサイクリングを楽しむ。夜は親子三世代がそろってホームパーティーに酔いしれる。こんな風景は過日見たコートダジュールのニースと同じではないか、これが昔の桂浜なのか、手結、宇佐の浜なのか、信じられない景色だ。

そんな夢を見ながら「シーサイド・カーニバル」は今年で六年目を迎える。毎回アクシデントがあり、赤字を出しながら種崎や桂浜でやってきた。高知が好きで龍馬が好きだから、土佐の青い海と空と山を生かした、誰でもが参加できて、スポーツや音楽を盛り込んだ楽しいイベントを成功させて、日本一の祭りになりたい。有名な県にしたい。全国の若者に集まってもらいたい龍馬の見た夢と一緒に見たい。

そんな熱い願いが去年は二万人の観客となり、ウインドサーフィン・レースは西日本から一二〇名、コンサートは岡山、香川、愛媛、徳島からと三〇数組の参加となった。スガジャズダンスのメンバーも数十名の熱いステージを見せてくれた。ボランティアのスタッフが毎年二〇〇〜三〇〇名も手伝ってくれる。今年も三万人くるかも知れない。今年もやっぱり続けたい。一〇年後のニ

せんだん礼賛

岡田 敏子

ごしかる北山越えて来し道の並木のはなは せんだんの花
「阿波池田より吉野川沿いに土佐に入る」として、大正七年、富田碎花来高の時の詠である。

当時新進気鋭の詩人碎花は文芸講演会の講師として高知新聞社の招きに応じ、神戸からはるばると四国山脈を越えての来高であった。今なら飛行機でひと飛びの道のりだが、土讃線のまだ開通していない時代、どのようにして山越しに來られたのであろうか、ともかくもやっとなどり着いた高知、額の汗をぬぐいながらほっと一息入れた峠から見渡すと、眼下にひろがる青田の中、高知城のそびえる市内へと一筋つづくうす紫のせんだんの花の帯に思わず息をのんだのではなからうか、そして、やがてその並木道にさしかかり、初夏の風にそよぐやさしい花陰を行きながら「南国土佐に來つるかな」の想いを深くされたことであらう。一宮

から比島へとつづくこのせんだんの並木はまことに美事であった。後日土佐一宮より、この歌の歌碑を建てたいとお願いしたけれど、文学碑ざらいの碎花は応じて下さらなかった由、美しい並木の無くなった今、惜しまれてならない。

想えば昔は高知の市の中いたるところにせんだんの木が植わっていた。それが今はどうであらう。一宮をはじめ各地の並木も、道路の拡張や舗装工事などのためほとんど姿を消し、残るは高知公園板垣退助銅像横の天に聳える老樹。かつてせんだんの花をかざして「あふち祭り」に集まったすべり山に少し。それから虫橋の電停の北側に数本。朝倉の高知大学の構内……。何と少なくなってしまうことか。

私は今一度高知の市中にせんだん並木の復活を夢みる。さしあたり鏡川の河畔に植えたい。せんだんはずんずん大きくなり、その花は美しい土佐の五月を一層美しく彩り、夏は市民のために涼しい木陰を作り、旅人には四季折り折りの風情で南国の城下町を演出してくれることであらう。そして出来ることなら天涯孤独の中に一昨年九十三歳で亡くなられた天上の碎花におゆるしを乞うて、その歌碑をせんだんの花の下に建てたいと想う。(高知県民芸協会理事)

高知にあるもの・土佐の文化

山本 忠 司

四国山脈を越えて高知へおじやまするとき、瀬戸内ではまだ寒いと感じているときでも、列車が高知平野の中にさしかかると、もう菜の花が一ぱいに咲いていて、ああ南国高知だなあと実感感が伝わってくる。

私達はいつも四国は一つだと思っているけれども、四国山脈を境に、大きくは太平洋側と瀬戸内側に分けられて、片方が男性的という表現をするならば片方は女性的であろうか、一方が静的であれば一方は動的と言えるかも知れない。事実高知から瀬戸内側へ向うとき、山脈を越えて内海の鳥影が見え始めると、そのたたくまいがまことに静かで、寂として箱庭のようにさえ思えるのである。

そのような二面性を持つ四国、故に四国は一つの国として面白いのだ、と私は思う。

大きくはそのような地理的自然的背景の上に立っての文化論であるよ

うに思われる。また文化をつくるのは人であり、人を生み出すのは地域を構成している自然と大いに関係があると思われるのである。

例えば瀬戸内海側の讃岐からは、宗教家としての空海の他五人の大師と言われる人を生み出しているし、太平洋を受ける高知からは革命家として知られる坂本龍馬他が生まれている。

とに角、四国の中で瀬戸内海側のわれわれから見れば、四国山脈を越えて向う側にある国、それは兄弟ではあるけれども、女兄弟ではなく、明らかに男兄弟なのである。

その男兄弟である高知は、最近建築に關係する文化論について大変熱心で、例えば、大学を出た若い人達が中央で一旗あげようという一世紀前の野望の形ではなくて、地元に戻り高知という郷土に腰を据えて建築という文化を含めた地域づくり、ま

ちづくりをやっているという姿勢がはっきり見られるのである。

例えば具体的には、中央からあるいは県外等から講師を招いて夏季セミナーなるものを毎年開いている。私も一度参加させてもらったことがあるが、これは通り一遍のものではなく、時間をとっぴりかけてトキキングをする。また高知市都市美デザイン賞というユニークな企画性と熱心な応募状況等を見るにつけても、四国の他の都市は勿論、全国的に見ても多くの地方都市と比較して、かなり水をあけていようように実感として思われる。

そのような現実を踏まえての現在の高知のまちづくりや建築について論ずる前に伝統的な高知を勉強しておかねばならないが、私の知識は誠に貧弱で、高知の殿様が山内一豊であつて、その奥様が大変に貞淑なえらい方であつたという位しか知らないが、その時代から連綿と続いているといわれる高知の日曜日については大変に興味がある。延々一キロメートルもあるか、これこそ庶民のショッピング街、肩肘はらない気楽さ、売り手買い手の人間的なふれあい、はりまや橋の歌詞にある物語りが、今もここには生きていようでもある。

もう一つ私が感心しているものに、

歓楽街の彫りの深さがある。たしか戦後のものであろうと思われる木造二階建ての「とんちゃん」と言ったか、大変にくつろげるお店である。それにまた平面計画が大変にうまく出来ていて、中央にあるサービスクウンターは下階にある厨房とうまく簡易リフトで直結しており、それを中心に客席は広がっているのである。ここでもやはり日曜市の精神が生かされている、と私は見た。

コンクリートでつくられた三階、四階建ての立派なお店も出来ていて、それらは他の都市のものと比較してもかなりすぐれていると思う。それらの中には現代の前衛的な形でデザインされたものも見られ、なかなか格調も高い。ただ私は、日曜市的な、とんちゃんのお店が現代の工法や材料を使ってもう少し出来てもよいのではなからうかと思つた。それは他の都市にはない高知特有のものだからである。

こんどの高知市都市美デザイン賞で入賞した広末ビルは、日曜市的な流れを汲むものとして大変に面白い。とかくまちづくりとしてはベルト状で通りを一方方向へ流れていき、また同じところを引き返すという単純動線のものが多いが、ここで計画されたものは、帯屋町という通りと、おびさんロードという二つの通りを

私の風景

手結

川添 寛

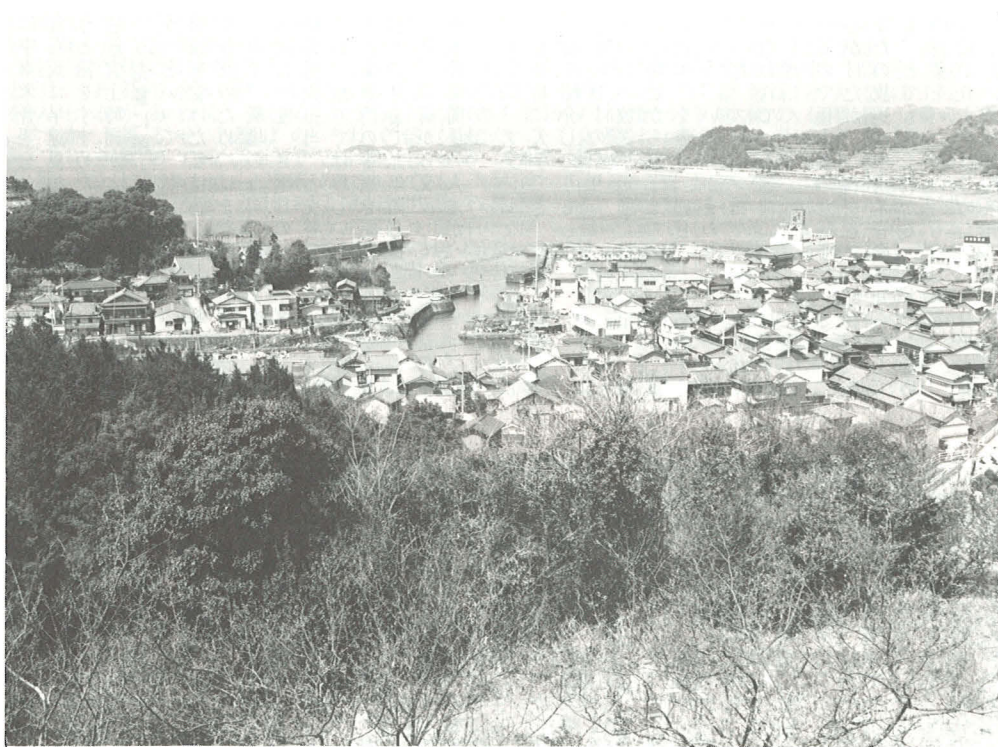
昭和六一年三月三日撮影

高知県方言辞典 全語収録
B全 ポスター

土佐方言 一万五千語

でんごもり おらんぐことは 近日発売!!

定価800円
発行 高知市文化振興事業団



私は港がすきです。なぜか、ロマンチックな世界への入り口を感じるからです。なかでも手結は日常的なところがいいと思います。

たのしきかなラテンの集い

永瀬公信

私の家では三年前から二カ月に一度、中南米音楽のレコード・コンサートを開いている。特に規約もつくりず会員制でもないから、中南米音楽に興味のある方やこれから聞いてみようとおっしゃる方が集まる。手狭な部屋だがコンサートの日午後一時過ぎには愛好家達が続々と訪れる。仕事の都合で遅くなる人もあれば、早い時間に来て早目に帰る人もある。誰ひとり来ない日があってもコンサートは休まないつもりであるが、今までにそんな開店休業日は一度だつてない。会の名をドミンゴ・ラティノ(日曜日はラテンで)という。主催者の私が勤めを持つ身だから日曜日でなければコンサートを開くことが出来ない。だからこんなスペイン語の名称を付けた。

私は昔からキューバやメキシコやプエルト・リコの音楽が好きである。タングムも、クラシック音楽よりはましなので何となく聞いているうちに段々と好きになってしまった。ブラジルのサンバやバイオン、アルゼンチンのガイトやサンバやカルナバリート、ボリビアのウァイノ・ディアブラダ、チリのトナリダ、クエカ、コロンビアのパンブーコ、クンビアなどの民俗音楽も大いに興味がする。だが何と云ってもキューバのルンバ、チャ・チャ・チャ、ソン、グアラチャ、マンボ、コンガ、ソニアフロ、プエルト・リコのボンバ、ブレナ、アギナルド、メキシコのポレロ、ランチェラ、コリド、ソン・ウアステコ等はもっとも愛好するところである。

東京に行くとき必ず立ち寄るのが、メキシコ料理の店だが、そこには大概日本人のラテン音楽演奏家達が出演している。時には本場のアーティストだつて出演しているが、テキキラやセルベサ(ビール)を飲み、タコスやエンチラダなどというメキシコ料理を、しかも安い値段で味わい、マラカスやグイロ等の打楽器を演奏させてもらうときのすばらしい雰囲気はいっしょに現実を忘れてしまいう程である。

私が中南米音楽を研究するようになったきっかけは、昭和二十六年四月、NHKラジオ第二放送で毎週土曜日午後七時半から放送していた高橋忠雄氏が担当する「ラテン・アメリカ音楽の時間」をキャッチしてからである。中南米音楽全般にわたって選曲され、解説もわかり易くて、当時高校生一年生の私に夢とロマンを与えてくれた。以来今日まで三十年、私のラテン・アメリカ(中南米)音楽に対する情熱はますますファイバーするばかりである。ラテン音楽は我が人生の大きな心の支えとなっているが、さらにラテン音楽と私を強く結びつけてくれたのは、喫茶店「ぶどうの木」のマスター島田彰夫氏だつた。彼は今は彼の弟が経営している喫茶「ラテン」の創業者であり、中南米音楽のコレクターでもある。「ラテン」に彰夫氏がいた頃、NHK高知放送局で当時副部長だつた倉石徹郎氏が常連客だつた。倉石氏は旧姓を山崎といい、昭和二十八年から三〇年までアナウンサーとして同局が相模町にあった一活躍していた。NHKでは

ローカルFM放送「夕べのひととき」に中南米音楽をセレクトすることになり、倉石氏は早速島田氏をDJに起用しようと言話をすすめたが、島田氏は「喫茶店経営上時間がとれないから、永瀬という先輩に頼んでみてはどうでしょう」といって、私に話を持ってきて。相談を受けた私は迷つたが、中南米音楽普及のためにまたとないチャンスなので、職場の上司の許しを受け、二週間に一度、月曜日のハワイアン(川崎秀男氏担当)と交替で一回五〇分に及ぶ、地方では珍しいと言われた中南米音楽専門の番組を昭和四八年から五年三月まで九年間も担当した。これには、以前から交流していた東京の中南米音楽関係の人達がバックアップしてくれたので、アメリカやキューバ、メキシコ、ブラジルなどの直輸入のLPも容易に入手でき、全国に先がけて新譜を紹介したりもした。

私のDJのやり方は、必ずノートにその日の放送予定曲だけではなく、放送の開始から終了までスク립ト(放送台本)を書き、曲目ごとに解説するという、いささかまわりくどいやり方だつた。スペイン語やポルトガル語でうたわれている歌曲についてはLPのライナーノーツ(解説)に詳記されているので極力歌の意味を伝えるように心がけたが、これが意外と好評で「あなたの放送は中南米音楽を知らなくても、とても良くわかる」とお誉めの言葉をいただいたものである。私がDJをはじめた頃、NHK本局にはタンゴの大岩祥浩、ニューヨークのラテン(サルサという)の金丸昌矢、タンゴ、ラテン、シャンソン、ポピュラーなど何でも来いの永田文夫、メキシコ音楽の谷川越二などの一流のメンパーが活躍していた。谷川氏は時々民

農と食

関田和子

いま、農協や生活改善グループを中心に自給運動が全国的に展開されている。農家が自分で食べるものを作るという当然のことが、いまなぜこのような運動としてとり組まれるのだろうか。運動のねらいは、この四半世紀の間に六割から二割にも低下した農家の自給率を高め、農家の自給思想を呼び起すのだという。

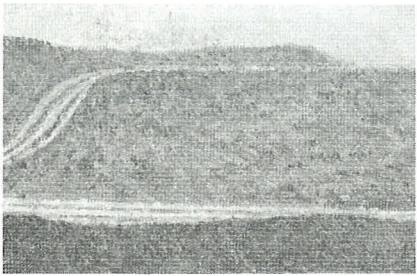
高知市内で育つた私が、はじめて農村生活を知つたのはいまから三十数年前、大篠村(現南国市)の準飯米農家へ嫁いだときからである。

当時、まだ主食は配給制で一人一日当たり二合七勺。いも、みそ、しょう油をはじめ燃料の木炭まで統制されていたので、非農家の暮しは「食糧難」から完全には解放されていなかった。一方農村の食生活は、例えば我が家で見れば、家の前の一反足らずの田圃(たんぼ)で二期作をやり、畑では年中切れ目のないように野菜をつくり、屋敷の回りには、ピワ、水蜜桃、イチジク、柿、紅ミカンが植えられていて、四季折々の新鮮な野菜や果物が食卓にのぼっていた。山羊や鶏も飼っていたので、山羊乳や卵などの動物性食品も自給できた。漬物、みそなども作り、豊作で米が予想以上に取れたときには、姉が息子である主人のためにこっそりドブロクをつくっていたこともある。町の住民に較べはるかに豊かな食生活をしてきたといえよう。

田畑の仕事のさきやりは姉であつたが、休日には家族総出で手伝い、百姓仕事になれない主人が肥桶(こえたこ)

を担つてひよるひよる歩いていると、「もつと腰をすえんと桶(たご)が揺れて肥をかぶるぜ」と親切に教えてくれる人もいた。農業労働は決して楽ではなかったが、家族が協力分担して作物を育て、作るということには金では得がたい何ものかがあつた。農家の生活の良さというものである。

昭和三〇年以降の高度経済成長のなかで、基本法農政下の「農業近代化」



道 大野 長一

選択的拡大、主産地形成によって農家の生産は専作化し、雑多な営農部門とともに自給生産部門は切り捨てられた。自給の放棄とともに伝統的料理も農家の食卓から消え、食糧を生産している農家の台所ままで、食品資本の製品が容易に入り込める条件がつくり出されてしまった。現在の農家の飲食費自給率二割というのは、そのほとんどは米の自給なのである。高知市周辺の施設園芸農家の中には、その米さえ買つて

いるということ聞いた。いまはとにかく商品経済の世の中である。昔のような自給自足的な食生活へ戻れというのではない。しかし、本来農業は自分たちの食べるものを生産し、それを上回る分を地域へ、全国へ向けるというのが基本だつたのではない。工業などが遠い自給を基礎にして、そのうえに商品化して販売があるので正常な農業のあり方というものである。大都市市場向けの生産、流通を否定するものではないが、それに偏して、農家の日常の食生活が、自家の生産物と無縁である、地域の食生活が地域の生産物に依拠していないなどというものはやはりおかしいというべきではないだろうか。自家で生産したものを地域で消費する、地域で生産したものを地域で消費する、それを延長していくけば自国の食糧は基本的に自給することになる。

ところで、最近都市では、包丁と組板(まないた)を持たない家が増えていっている。下手に切つたり、刻んだりしなくても量販店に行けば、野菜を用途に応じて切つて売っている。みそ汁の実ぐらいいはさみで切ればよい。というわけである。手づくりブームの一方で、このような食の簡便化が進んでいるのである。

そういえば、NHKのテレビでみたことだが、最近「カット野菜」がよく売れている。なぜかという、料理の目的に合わせていろいろの野菜を切つて詰めてあるので、手間が省けるうえに、材料が無駄にならないというのだそうである。まさに包丁と組板は不要である。しかし、昔から料理人のことを「包丁人」、料理の手ぎわのすばらしいことを「包丁さばき」という。包丁は決して料理とは無縁ではないと思

音タンゴシリーズの司会者として来高し、私と同年という気安さもある。よく飲みに行った。

民音タンゴといえはほとんど毎年のように高知にアルゼンチン・タンゴの著名な演奏家達が訪れる。この中でもレオポルド・フェデリコについては面白い思い出がある。たしか昭和五二年頃だつたと思うが、私は彼とコントラバス奏者、それに谷川氏らとで食事に出かけた。そのときレストランでフェデリコに私は煙草を勧められた。喫煙しない私は「ノー・フーモ・グラシアス」(いや、煙草は吸いません。ありがとう)とお断りした。ところがしばらくするとまた煙草が目前にきた。「ノー・グラシアス」と断わつた。ところがしばらくするとまた勧められた。とうとう私は「グラシアス」と一本いただいた。するとそれから矢継ぎ早にくるわくるわ。結局数本吸つたが今でも煙草を見るとこのことを思い出す。

今年二月一日、私は東京からサム・モレーノというラテン歌手を初めて高知に招いて「龍馬サンバ」でぐうびいばあ共演したラテン打楽器の名手、橋田典人君を組合せ、コンサートを開いたところ、五十人のつもりが百人以上も参加しての大騒ぎになった。踊るリズム、感傷的な中にも明るい情熱のメロディー、わずかに七種類の和音から成るシンプルなたラテン独特のコード進行。誰もがすぐ立ち、体を動かしたくなるラテン音楽はこれからも二、世紀の音楽として必ずやよろこばれるであろう。(ドミンゴ・ラティノ主宰)

永瀬さんは、この稿を書かれた後、四月一八日、急逝されました。ここに慎んで哀悼の意を表します。

農家の自給生産物の中で、鶏肉は最高のごちそうである。鶏をさばくのは料理のうちだから主婦がやる。いま鶏のさばける人はめづらない。さばく技術を持ったぬえに気味が悪いという。魚でさえおろすのが苦手という人が多い。家政学専攻の女子大生に、鶏のさばき方の話をしたら悲鳴をあげた。そのことを調理の先生に話すと、鶏どころか、魚をおろすのも大変だということであつた。

物を生産し、料理して食べるというのは人間の基本的能力である。何もかも加工品や既製品に頼るのは人間の能力の喪失であり、家庭の重要な要素が欠落してしまうのではないか、気がかりである。

高知市の東部農協婦人部が、地域の伝統的な技術を、消費者に伝えて手づくりの味を知ってもらい、加工の原料を売るという計画をたてている。地域の伝統的な技術の持ち主といえれば勿論高齢者である。高齢者の知恵と技術を引き出すのに、この人を「村一番さん」と名付けて、例えば、つけ物大学を開催する。高知市のように混住化の激しい地域では、加工品を作つて売るより、技術を媒介にして、消費者とのコミュニケーションを深めることが大切だといふ。これは地産地消(地域の生産物を地域で消費する)をすすめる新しい試みである。これをバックアップしている生活改良普及員が「この体験を通して、農業のよさを農家自身に確認してもらいたい」と言っていた。

「農業は人間性形成の基盤である」といふのは、農業の父と呼ばれたアメリカ第三代大統領トーマス・ジェファソンの言葉だそうである。(元高知県農林技術研究所専門研究員)

私の自然

(三)

山脇哲臣

(題字 写真)

書けと書いて頂いた題が、「私の自然」ということであった。そういう題名を貰ったとき一瞬これは困ったと思った。その時は咄嗟であつたので困ったことの原因を明確に掴んでいたわけではなかったが、後になって少しは落着いて考えてみると次のようになる。

自然というものは、私に關係なしに存在する。無数の小宇宙を含む大宇宙から、地球上の落葉の一つに至るまで、人間と人間の行為をのぞいたすべてのものを自然と考えるならば、それらのものは、私が生きていようと死んでしまおうと、そういうことに関する限り無關係に存在する。私が石鏡山の頂上に登り、その頂をハンマーで叩き砕いて、石鏡山が一センチ低くなつたとかいふか、わり合ひ以外には、私が死のうが生きようが、大宇宙の中心からみれば大したことではない。つまり無縁とはいへぬけれども、無縁に近いものである。

それを「私の自然」といわれると、その大宇宙、小宇宙を含めて、私が所有したような感じになる。そうすると沢山の方々がいらつしやるのに、私が自然を専有すると、他の方々の自然がなくなつてしまふことになるような感じがする。こんなことをまともに書く

と、あいつ嫌な奴だということにもなりかねない。私は女性と山へ行くときは、立派な山林があると、それが国有林であろうと民有林であろうとおかまひなしに「お前さんの小遣いにやろう」ということにしてある。それでまだ林野庁からも山林の所有者からも叱られたことはない。そればかりか貰つた女性からは喜ばれて、ヒノキがどればあつたか見に行きたいと催促される。それなら私に行き「私の自然」となると公有物を私有するようで一丁抵抗を感じるわけである。奥物部の自然とか石鏡山系の自然ということを書けば、読む人にとつても抵抗はなかるうが、私の自然という、天下天下唯我独尊みたやうで、俺達の自然はどうなるのだ、お前はお釈迦様になつたつもりか、この思い上りめ、頭は確かかというお叱りを受けても仕方がないことである。

処が、ところがである。本当は「私の自然」が一番正しいのである。理論の上からも、論理の上からもそれが一番正しいのである。人それぞれ私の自然を持つてゐるのである。星の関勉さんは、勝手に関さんを抱き出して申し訳ないが、関さんには星辰の大自然観を持つておられるだろうし、私は植物の生殖器たる花ばかりの世界観を持つてゐるし、二人の自然観は同じといへば

同じかも知れぬし、違ふといへば違ふかも知れぬし、このことは両性に異性の性感を知り得ぬ如く（それを知つてゐるのは、ギリシャ神話に出てくる何かという化物であるという）、同じ宴の酒を飲みながらも、酔いはそれぞれ異なるが如きものであると思ふ。酒を飲めば酔うことは確かだけれど、一人は酔えば未来を想い一人は過去を想い、一人は泣き一人は笑ふ。酔いという共通の場を持ちながら、酔いの現象はまるで正反対であることすらある。それは自然という共通の場で、認識という現象は各人実にさまざまであるのも全く同じで、そればかりではない、同じ人が時によつては、酔つて笑い、酔つて泣くことすらある。

自然というものは、各人の前に共通不変の姿である存在のようだけれど、その実各人の感覚で認識した、要するにその人その人の自然にしかすぎないのである。こうした考え方は、私がここで屁理屈をいつてゐるのではない。印度ではこうした考え方が、すでに二千年もの昔からあつたやうで、こうした論理の展開のしかたを唯識（ゆいしき）という。唯識によれば、見られるもの、あるいは聞かれるもの、感じられるもの、それらはすべて見る者の心が分かれたものだといふ。そこに桜が咲いてゐる。その桜は自分とは別の存在でそこにあるものではないといふ。自分の心が二つに分かれて、一つは見る心になつて（これを自分と感ず）、一つは見られる心（それを対象と思ふ）になつてゐる。桜の花は要するに自分の心なのである。桜に限らず対象として見るもの聞くもの、すべては、自分の心がそこに、見られるもの、聞かれるものになつて存

在するといふ。少なくとも唯識はそういうような説き方をしている。とすると、自分を取り巻いて存在する自然は、自分とは別個の存在ではなく、少なくとも自分の心が見られるものとなつて、星辰・バクテリアに至るまでの、森羅万象となつてゐるということになる。まさしく、各人各人の唯識の世界なのである。つまり三界は唯心の所現といふことになる。ではその心はどういうことになるか、五識・六識・七識・八識などあるといふが、これについて蘊蓄（うんちく）を傾けることはできない。

今の私ではこのまゝでが精一杯といふところなる、それ以上になるとボロが出る。では何故唯識をいふかといふと、今私は県の老人大学の講師なるものを仰せつかつてゐるのだ。始めのうちは一回で卒業するから、学級それぞれに対しては一回の話でよいからというのである。まあ一回なら何とか話もできると思つて引受けた。生徒は私よりも年齢は上であつたり下であつたり、時には県庁の先輩の座つてゐる顔がみえたり、平均すると、私より徳を積んだ人が多い。だから始



甲崎

めのうちには差し当たりのない植物の話をしてゐたが、そのうち老人大学が二年制になり、今度では生涯教育になつてきた。この前も中村分校でよく顔をみる婦人がいるから私の話を何回聞いたと問うと、五回だといふ。私には五回も変つた話を新しくする能力はないのである。それに一回生が混じつてゐると、どう話をしていいのかわからぬのである。もう私の話も聞き飽きたらうといふと、年がいくと忘れようなつちゆうきに、何回でも話してつかさい、などしゃあしゃあしている。まあこんなことで私は否応なしに、新しい話を仕入れてこなければならぬ立場にある。それが相手がお年寄りだが、講師の方もちよつとそれ相応の年齢で、考えることは似たものだらうと思ふ。その似た考えとは何かといふと死んだら果して天国に行けるのか、地獄へ墮ちるのか、地獄へ墮ちるはせぬかとの不安がつきまつた。映画俳優をしていて、今心霊の大家になつてよくテレビに出てくる丹波哲郎氏などの死後の世界はありますなどのテレビを見てみると、余計に心配になつてくる。一体どの位の悪いことをしたら地獄へ墮ちるのか、女を（女の場合は男を）騙したらどの位の罪につ

同じかも知れぬし、違ふといへば違ふかも知れぬし、このことは両性に異性の性感を知り得ぬ如く（それを知つてゐるのは、ギリシャ神話に出てくる何かという化物であるという）、同じ宴の酒を飲みながらも、酔いはそれぞれ異なるが如きものであると思ふ。酒を飲めば酔うことは確かだけれど、一人は酔えば未来を想い一人は過去を想い、一人は泣き一人は笑ふ。酔いという共通の場を持ちながら、酔いの現象はまるで正反対であることすらある。それは自然という共通の場で、認識という現象は各人実にさまざまであるのも全く同じで、そればかりではない、同じ人が時によつては、酔つて笑い、酔つて泣くことすらある。

くのか、女房をやむにやまれず騙した場合も、女を騙したと同様、舌を抜魔様に引き抜かれるのか、その引き抜かれた後の手当をしてくれる医者が地獄にはいるのかいらないのか、そんな不安がつきまつた。だから自分が美味いと思ふ物は、他人も美味いだろうと思ふ同じ心理で、お年寄りには、地獄に墮ちないための話（多分手遅れかも）が喜ばれると思ひ、そんな話を老人大学のために読み習つて知つたといふわけだ。われながらいふ着想だと思つてゐる。そんなことで唯識といふ考え方もあることを知つたわけだ。

- 都市問題論文 「市政研究」から(二)
- 別冊市政研究(昭和四三年九月) 一 地下水調査特集号 一 高知平野における地下水の水質 今井嘉彦
- 高知平野の地質と帯水層 甲藤次郎・満塩博美
- 第十号(昭和四一年八月) 一 鮮食料品の価格騰貴と生産・流通・消費について 森井淳吉
- 高知市における青果物の流通と流通機構 梅原憲作
- 牛乳価格の構造とその問題点 森井淳吉
- 生鮮食品の流通機構と消費者の意識・態度 二宮哲雄
- 本山市の観光性格とその関係 一 高知市隣接山間地の開発方向 一 山崎修 第九号(昭和四〇年七月)
- 高知県中央地区の概況 高知県産業経済調査会
- 高知県中央地域の観光開発 山崎修
- 地方経済の一視点 有沢貞雄
- 環境衛生を主とした便所の管理 今野華
- 第八号(昭和三八年七月) 一 市民所得統計を利用される方々へ 石国直治
- 市民所得統計から見る高知市 石国直治
- 地場産業における技術革新と技術教育の問題点 粟津龍智
- 高知県漁村の就業構造 中井昭
- 戦後における牛乳生産の発展過程と問題点 森井淳吉
- 経済成長と地域の産業構造の変貌 川島哲郎・西沢弘順
- 高知市若松港の貨物輸送 山崎修
- 高知中央地区開発構想検討(案) 大阪市立大学都市計画研究室
- 別冊市政研究(昭和三八年二月) 一 経済基本問題特集号 一 高知市都市再開発に伴う調査報告 一 松淵川埋立土地利用に関する問題を中心として 大阪市立大学都市計画研究室
- 高知観光センター計画案 大阪市立大学都市計画研究室
- 高知市漁業の構造と課題 中井昭
- 高知市における農業生産の推移と農家階層分化の実態 関田英里・森井淳吉
- 高知市域における農村人口問題 二宮哲雄
- 高知市およびその周辺における工業発展 川島哲郎・西沢弘順・岡本正
- 高知市の観光対策に関する諸問題 一 主として交通について 一 山崎修 第七号(昭和三七年四月)
- 高知県機械すきと紙業の実態 高知県産業経済調査会
- 高知県機械すきと紙業の実態 高知県産業経済調査会
- 機械すきと紙業の最近の動向 高知県産業経済調査会
- 高知県における製紙業の発達(一) 西沢弘順
- 高知市観光診断報告書 日本観光協会
- 都市部 一 高知市宮前町の場合 一 栗津龍智
- 農業法人部落の成立とその展開過程 一 高知県安芸市八流部落の事例研究 一 二宮哲雄
- 戦後における高知市農業の推移と農業行政の変遷過程 高知県産業経済調査会

潮江読書会

久武 盛真



潮江市民図書館の読書会はこの一月で三十回になりました。この会には二つの特徴があります。その一つは参加者が自主的に本を選ぶ事で、出席者のリクエストが尊重されます。第二の特徴は自主選択の結果でもありますが、短編が愛好されています。長すぎて、多忙な人は次第に本から遠ざかり勝ちになりかねませんから、たとえ僅かでも本に親しみ、知識を新たにしようとする人の要求を満たすというのが潮江読書会の使命です。

書店は新刊の洪水ですが、読書会は広告に惑わされず、評価の安定した真に価値のある本を選ぶべきです。だから、評価の安定した本は、昨日今日出版された本の中で発見することが難しいから、勢いかなり前の本になるのはやむを得ないところ。二月は堀辰雄の『幼年時代』、一月は寺田寅彦の『読書の今昔』、十一月は芥川龍之介の『鼻』、十一月は樋口一葉の『にごりえ』という風に、中には教科書にもなっている作品もありました。わかりきったと思っている本も、改めて読みかえして見るとさすがに名作といわれるものには、新しい感銘があり、深い味

鏡川研究会

今井 嘉彦

鏡川研究会は昭和五九年十一月四日に清流復活を願う市民の発案で発足しました。鏡川は市民にとって文字通り生命の水源地であり、多くの災害を経験した都市河川でもありません。かつての緑豊かな岸辺はコンクリート化し、水質も次第に悪化の傾向をたどるなど環境は満足のできるものではありません。このような現実を憂い、浄化への取り組みを進めてゆくには全市民的な力が必要だとかく行政依存であったり、不満のみの要求では問題の解決にはなりません。鏡川研究会が特定のイデオロギーや政治的主張を排し、真に人と自然との調和を願う人達の集まりとしたのもそのためです。単なる市民運動としてではなく、市民、学者、行政が一体となってより科学的に問題をさぐり、具体的な浄化、保全対策を見出し、それを各方面に提言してまいりたいと念願しております。

初代会長に山本有二弁護士が就任されて以来、自由で活発な討議の雰囲気は今も続いています。会の内容は河川法、水質化学、治山治水、水辺生物の保護、水の文化史、親水機能など多方面に渡っています。さらに「水系は一つ」を合言葉に鏡川や土佐山村でも会を開き、地元の方と共に水源税やふるさとの森づくりなどを話題として熱く討議し交流を深めました。近くは清流の復活に成功し、仙台市の広瀬川を視察し、

英文誌づくりにも 憑かれて十年

関田 孝司

CHIT-CHAT



発行部数五〇〇、季刊、総英文タイ平均二〇〇頁「CHIT-CHAT」(軽いおしゃべり)と題した小冊子を発行して一〇年余り経つ。きっかけは、言いたいこと、書きたいことを、永年学校で学んだ英語に「日の目」をみせたいと小数の仲間と語りあっていたことであるが、「随より始めよ」というわけで、言いだしっぺの私が編集をやらせてもらっている。マヘル神父やザゴリ講師らの力強い助力もある。

現在三二二号。内外の寄稿者は三〇〇人を越え、高校生、一般社団法人、学者、在住外人に至る。原稿を受け取り、文字通り「盲、蛇に怖じず」で頑張っている。時には、編集者冥利とも言える数々の出会いも味わってきた。痛烈な戦争体験、わが子が成人の折読んでほしい父親の記、初めて母になったハツとする印象記、あるいは盲学校に入學して初めて面会に来た父親へ向けた笑顔とあとで褒められた幼時の想い出に点字で音楽と英語に挑んだ記録(勿論テープより書き起こしたもの)、一人のアメリカ女性の丸坊主になった体験記等々、心にいつまでも残る。仲間の一人は「以前は英文を書くという事が恥かしい思いだったが、これに書き始め英語で発想し、積極的に訴える事が出来た」と、又あ

高知県の子どもと教育を考える会

楠瀬 洋吉

誰もが口にする教育危機・低学力・非行・登校拒否・高校中退・いじめ等、大人なら高知県の教育の現状を何とかしなくてはと考えるものです。本会もこの願いの上に誕生しましたのですが、高度な専門的知見を中核として、ただの批判や評論でない具体的な改善策を提言しようとしています。教育問題の解決は論議や依頼の段階ではなく、県民ひとり一人がそれぞれの立場で何ができるかを考え、実践をすすめることにつきていえるのではないのでしょうか。昭和五九年一月一日に発足した本会では、次のような会則のもとに運営されています。

第一条 本会は高知県における子どもの幸せと健全な発達を支える幼稚園、小学校、中学校、高等学校教育樹立のため、建設的具体的改善策を立て、その実現に努力することを目的とする。

第四条 本会の会員は、高知県の教育について改善と向上に熱意を持ち、且つ本会会員より推薦を受けた県内在住の者とする。

この目的達成のため毎月一回の研究協議会(毎月第二土曜二時~五時公開)を開催し、一年間の成果をまとめて二月に「高知県の子どもと教育」という提言集を刊行しました。また、活動の一環として、火曜日スタッフによる電話教育相談「教育一〇番」を主宰しています。

広く県民の皆さんの入会参加をお

前進への証明

「物から心へ」「量から質へ」という価値観の変革がいわれだして、しばらくになる。高度経済成長期の大量生産、大量消費、使い捨てという「物」中心の価値観から「うるおい、やすらぎ、ゆとり」といった、心によってしか確かめられないものが求められる時代になったのである。

こうした中で、新しい視点にたった文化行政が、はじめ府県レベルで注目され、やがて市町村を含めた全国的潮流となってひろがっていった。文化ホールや美術館、博物館といった施設もブームのように建設された。本県においては、少し様子がちがって県レベルよりも市町村レベルの文化施設づくりが先行している観があるが、それにしてもこうした潮流の

風伯

中にあることは疑いない。一方行政施策のすべてを文化の視点から展開していこうとする「行政の文化化」についても、全国的に活発な取り組みがされている。

文化行政はいま、新しい胎動のときを迎えつつある。このときに一番重要なことは、その衝に当たるものに人材を得ることである。もろもろの施設にしても、建設しただけではどうにもならず、そのあとの運営こそ肝要である。結局は人を得るかどうにかかっている。

春の異動で、いくつかのポストで注目される人事がでてきている。それぞれに新味と意欲をもった活躍を期待するとともに、異動が新しい前進のためのものであることを証明してもらいたい。

(草)

二出版社の存在

目下、高知市で個人的規模で出版活動を続けているものに雑誌の「月刊土佐」社と、単行本の「土佐出版」社の二つがある。前者はいわば高知の風土的趣味思考に根ざしており、後者は文学を表現した形をとっている。いずれも立派に業績をあげ、次第に安定しつつあるように見られる。高知市には県・市の行政機関による出版と新聞社の出版との二つが今日まで代表して存在して来ているが、個人の出版事業の本格的なもの、ほとんど成功していない。会員組織の幾種かの雑誌や、いわゆる名士や経済人の作文を集めて出しているもの等は、この際論外としておく。

高知市のような小規模都市における者は「アメリカの前衛芸術をジカに知りたくて四〇過ぎて英語を始めたが、今は自分の故郷を見詰めて書き残したくなっている」と言う。慣れた日本語では言えぬ直截な表現を探し、恐らく何十遍も練り直し、半芻し、整理し、再結晶したコトバの新鮮さに、自分の中に埋没しかけていたものを掘りださる。

我々自身の内部や周辺を「英語」を通して掘り起こし、揺り出す作業へ、次世代を担う多くの若い人達の参加と引き継ぎを期待したいのである。

(CHIT-CHAT 編集代表) 連絡先 電話64-12039

高知県の子どもと教育

願います。

(高知県の子どもと教育を考える会 会長) はまゆう教育相談所内 事務局 電話22-6462

る出版がいかにかに難しいものであるかは編集発行にたずさわって来たものでなければ分らないだろう。ライターが少ないということと読者層が薄いと二つの二つが決定的な要因である。それは購買力の有無以前の問題である。こうした社会での二社の存在は、全くの個人的意思と思考による事業だけに大いに意を強くする。

東京を中心とする日本の文壇には今や純文学が地を掃ってしまった感があるが、やはり純文学II文章が無くては大量文学も存在価値が薄れてしまうという結果が出て来ているように思われる。

それはともかくとして、高知における「月刊土佐」「土佐出版」二社の発展・継続を切に祈るものである。

(由外)

財団の二つの公募事業（昭和六一年度）

第三回高知の映像コンテスト
の作品募集について

多くの皆さんに、日常生活で気づいた郷土を記録し表現していただく高知の映像コンテストも第三回をむかえました。豊かな表現と斬新な視点によって高知を活写し、多彩な郷土の記録をお寄せください。ここで集った作品は財団で大切に保存し、活用をはかっています。

テーマ 郷土の風物、生活、行事など
(例) 祭り／曜日／まちの景観、美観／河川／生活の中の文化／コミュニティ活動／高知の見どころ、旧跡等
作品受け付け 昭和六二年一月五日～一月二〇日*郵送または持参で。応募資格は制限ありません(個人でもグループでも可)

入選発表 昭和六一年二月中旬
*賞は審査によって増減することがあります。

協賛者の募集
個人、団体を問わず、このコンテストの趣旨に賛同し、ご支援、ご協力いただける方を募集します。財団までご連絡ください。

備考
①入選作品は一般に観賞していただく機会を有意します(日時、会場は後日公表)
②入選作品の著作権は財団に属します
③未発表の作品に限ります(同好グループや学校放送、自主発表会、地域の催し等との重複は問いません)

賞 入選(二〇点) 賞状と賞金一万円

佳作(数点) 賞状と賞金三千元
*ネガを提出していただきます。

応募規定
①六ツ切りの作品に限る(ワイドも可。カラー、モノクロ、組写真)

②古い写真も歓迎(但し、未発表のもので、撮影の場所、年月日、撮影者が明らかかなもの)

③応募作品は返却しません(応募者には協賛者提供の記念品を贈呈)

④応募点数に制限はありません(組写真の場合も一枚の作品が六ツ切りである場合も)

ビデオの部

賞 特賞(一点) 賞状と賞金十万円
入賞(五点) 賞状と賞金二万円

応募規定

①ビデオ・カメラで撮影した作品、または八ミリ、十六ミリフィルムで記録したものをビデオに編集した作品。テープは二分の一インチVHS、ベータ、八ミリビデオ方式に限る。
②作品は三分以上、一五分以内にとめてください。

③応募作品は返却します(応募者には協賛者提供の記念品を贈呈)

④応募点数に制限はありませんが、作品一本のテープで応募のこと。

⑤作品に他人の著作物を使用するときは、著作権法に注意してください。
*技術的な相談は高知市民図書館視聴覚ライブラリーまで
(電話22-8111)

第三回高知市都市美デザイン賞
の推薦のお願い

優れた建築や環境美化への試みが、個性と風格のある街づくりに大きく貢献しています。その奨励と顕彰をはか

るため、本市の都市美の向上に寄与すると思われる建築物や建造物の推薦をお願いします。

対象 昭和六一年一月一日から一二月三十一日までに高知市内でつくられた建築物や建造物で、①新しい都市美創出のモデルとなるもの②壁画・彫刻・その他これに類するもので文化的、芸術的環境をつくりあげているもの③総合的に計画された建築群で良好な街並みの景観をつくりだしているもの④周辺地域のシンボルとなるもの、を対象とします。

建築物や建造物の範囲
①住宅、店舗、工場、ビルなど一般建築物(公共建築も可)
②生け垣、並木、広場、庭園、公園
③壁画、彫刻、門、モニュメント
④道路、橋

表彰 特賞(一点) 入賞(二点)

*発注者に表彰状と表彰銘板を、設計者に表彰状と副賞をおくりします。
*適当なものがなければ表彰しない場合があります。

選考 県内および中央の都市計画、建築、文化等の各分野の専門家、学識経験者で構成する選考委員会で、厳正に選考します。

推薦方法 自薦、他薦は問いませんが、つぎの書類の提出が必要です。
①高知市都市美デザイン賞推薦書(所定の様式による)

②推薦物件のわかるキャビネサイズ以上のカラー写真(2枚以上、位置をかえて撮影したもの)

③推薦物件の形態、構造のわかる平面図と立面図(青焼きのもので可)

受付期間 昭和六二年一月五日～一月二〇日
入賞発表 昭和六二年三月上旬

好評発売中! お求めは書店または財団まで


高知県方言辞典

定価 6,000円

古語から現代語にいたるまでの土佐方言約14,000語を網羅。県下全域にわたって現地協力者を得て、あらゆる日常方言を蒐集。見出し語にアクセント記号を付し、例文を示し、注釈を加えた。方言学者土居重俊、浜田数義両氏の半生にわたる調査研究の集大成。画期的業績。

特徴

造本・体裁 A5版・上製・貼函入・本文707頁



第30回高知県出版文化賞
特別賞受賞

財団法人 高知市文化振興事業団
〒780 高知市本町五丁目二番三号
TEL (〇八八八) ⑦③ 四三六五
郵便振替 徳島8-14869